

優秀修士論文概要

アルフレート・デーブリンの中国短編小説の解釈

高 山

本修士論文では、ドイツの作家アルフレート・デーブリンの小説『王倫の三跳躍』から削除された四つの短編（「Der Überfall auf Chao-lao-sü」「Gespräch im Palast Khien-lungs」「Der Kaiser und die Dsungeren」「Die Fürstentochter」）を研究対象とする。分析の視点は、第一に風景描写の叙述的機能、第二に中国戦略思想との関連、という二つの軸に据えられる。

従来、風景は雰囲気づけの要素と見なされてきたが、本論文では中国詩学の賦・比・興の概念を援用し、風景描写が物語の叙述構造に組み込まれていることを示した。これら三つのモード——すなわち賦は事物を直接に描写する方法、比は類比によって意味を転移させる方法、そして興は自然のイメージから感情を喚起する方法である。自然描写における対立的な自然景物が反復的に重ね合わされることによって記号のネットワークが形成され、事件の伏線や人物の内面変化が自然景物に投影される。その結果、読者は多義的なイメージを読み解くよう誘導されるのである。

さらに、中国戦略思想（『孫子兵法』など）における「風と勢」の概念を適用することで、登場人物の政治的・社会的な駆け引きを説明できる。風とは間接的な言説を通じて相手を動かす戦略、勢は全体の形勢を把握し、一挙に有利を勝ち取る力学を指す。例えば、「Der Kaiser und die Dsungeren」では、乾隆帝が詩を通じて柔和な姿勢を装いつつ、大規模な弾圧の布石を打つ場面に「風」と「勢」の連携が見られる。以上の分析から明らかのように、これら四つの物語における中国的要素は、単なる異国趣味にとどまらず、詩学的技法や戦略的思考を通じてテキストに深く埋め込まれている。本論文は、こうした中国との異文化対話を通じて、表現主義文学における風景描写の新たな解釈可能性を提示した。

『王倫の三跳躍』の成立過程において、当初構想されながらも単行本から削除され、後年に独立した短編として発表されたテキストが四篇存在する。本研究が対象とするのは、まさにこの削除された四つの物語である。そのうち「Der Überfall auf Chao-lao-sü」は、もともと長編の冒頭に置かれる予定であったが、デーブリンの中国文化顧問であった Martin Buber の助言に従い、作品全体を「成長小説」の形式に整えるため削除されたとされる。他方、「Gespräch im Palast Khien-lungs」「Der Kaiser und die Dsungeren」「Die Fürstentochter」の三篇については、刊行時に割愛された明確な理由は伝わっていないが、いずれも独立した物語世界を形成しつつ長編と関連している。

「Der Überfall auf Chao-lao-sü」は、1912～13年頃に長編の序章として執筆されたが削除され、1921年に雑誌『Genius』に掲載された。物語は将軍 Chao-hoei の息子 Chao-lao-sü が夜間に女性を襲おうとして反乱軍に捕らえられる事件を発端とし、その後、父が政治的取引を通じて反乱鎮圧を図る過程を描く。続く「Gespräch im Palast Khien-lungs」は、長編第三部〈Der Herr der Gelben Erde〉の一章として構想されたが刊行時に削除され、1922年に『Berliner Börsen-Courier』に「未刊の断章」として発表された。乾隆帝、嘉慶帝、群臣の間で繰り広げられる政治的議論がテーマであり、表面上は嘉慶帝が

父を説得するように見えるが、最後の自然描写は皇帝の真意が変わっていないことを示唆している。さらに1925年、『Das Kunstblatt』誌の記念号に二篇の短編が掲載された。「Der Kaiser und die Dsungeren」では、乾隆帝が準噶爾にいる少数民族に対し当初は外交的姿勢を装いながらも、最終的には苛烈な軍事行動に踏み切る過程が描かれる。他方、「Die Fürstentochter」は若い王女の逃亡劇を中心に据え、歌謡によって心情を間接的に表現する物語であり、個人的な経験が風景描写や比喩的表現を介して政治的抑圧と抵抗のイメージへと転化される。

以上の四篇は、『王倫の三跳躍』の刊行から外れた経緯を持ちながらも、それぞれ独自のテーマと物語構造を備え、長編小説の外縁に位置しつつもその理解を補完する重要なテキスト群と位置づけられる。

研究史を概観すれば、自然描写が「Der Überfall auf Chao-lao-sü」と「Gespräch im Palast Khien-lungs」において顕著な叙事的機能を担っているにもかかわらず、その具体的な構造はこれまで体系的に検討されてこなかった。Christoph Deupmann は「Der Überfall auf Chao-lao-sü」の冒頭における風景描写を、中国の地名や図像モチーフを意識的に導入することで異国情緒を創出し、さらに環境描写によって「異質な中国」をドイツの読者にとって距離を保ちながらも生き生きと提示する効果を持つと解釈している⁽¹⁾。また Katrin Hudey は、同じ場面を映画的手法による動態的自然表現として分析し、自然に行為能力を付与することで物語の推進力を強調している。さらに彼女は鮮やかな色彩表現や比喩を指摘し、読者を異国的な物語世界へと導く装置としての機能を強調した⁽²⁾。両者の議論は、風景描写の持つ「異国的雰囲気」を鋭く捉えているが、叙事構造上の機能については十分に論じられていない。加えて、「Gespräch im Palast Khien-lungs」における空間構成の役割に着目した研究はほとんど見られず、残る二篇「Der Kaiser und die Dsungeren」と「Die Fürstentochter」に関しては、これまで独立した分析が行われていないのが現状である。

「Der Überfall auf Chao-lao-sü」では、冒頭の自然描写に山・水・光・花の描写が重要な役割を果たしている。山は父性的存在、水は女性的な媒介、花は子どもに対応する形で配置され、特に花のモチーフは子供の Chao-lao-sü に重ねられる。また、Hai-tang は母としての慈愛と妻としての助言を兼ね、家庭と政治の双方に影響を与える存在として描かれる。一方で、山が光を受けて初めて輝くように、Chao-hoei もまた自ら行動するのではなく、常に外部の力に依存する「受動的な存在」として示される。こうした風景描写の中に人物関係や物語の方向性が暗示されているのである。さらに、物語の第四場面における政治的駆け引きでは、Tang-schaoi が「風」として歴史の逸話や話題転換などの戦略を駆使しながら、同時に「勢」として有利な状況を築き上げ、最終的に Chao-hoei を従わせる構図が描かれる。

「Gespräch im Palast Khien-lungs」の中では、乾隆帝の宮廷での議論を軸に、Jia-ying と Song 大臣が比喩と歴史的逸話を用いる「風」と、状況・資源を組み替えて有利を作る「勢」を連動させ、軍事征服方針をやわらげていく過程が描かれる。彼らは「鉄・玉・水」の比喩や宣教師の話など間接的な言い回しで乾隆帝の判断を少しずつずらし、表向き和やかな宴席の裏で言語戦が進む。他方、叙述は儀礼の華やかさを描き込み、対話の混乱と形式的調和のコントラストで権力の駆け引きを浮かび上がらせる。

(1) Christoph Deupmann: Chinoiserie und „Tatsachenphantasie“. Alfred Döblins Der Überfall auf Chao-lao-sü und die Verflüssigung ethnografischen Wissens. In: China in der deutschen Literatur 1827–1988. Hg. von Uwe Japp und Aihong Jiang. Frankfurt a. M. et al. (Peter Lang) 2012, S. 103–113.

(2) Katrin Hudey: China in der Literatur der Zwischenkriegszeit: Studien zum deutsch-chinesischen Austausch (1919–1937/39). Berlin, Boston (de Gruyter) 2023.

文章の最後では、フルートの低く速い音が響くなかで「岩が積み上がる」イメージが生まれ、そこから遊牧民や細い流れの描写へとモンタージュ的に切り替わっていく。この場面は賦・比・興のうち「興」として機能しており、宮廷での議論と辺境の厳しい現実を詩的に結びつけながら、物語の結末をあえて未確定のまま残している。明確な結論を示さずに読者に政治的帰結を推測させる仕組みであり、その結果、表面的には調和を描く形式と、水面下の権力闘争が互いに照り返す構造となっている。

「Der Kaiser und die Dsungeren」は、乾隆帝が準噶爾地域に対して少数民族に大規模な弾圧を行う過程を描いた短編物語である。物語の中で皇帝は詩を詠み、敵の勇気を讃えるなど、文化的で穏やかな姿を見せる。しかし決定的な場面では「これは詩ではなく詔勅である」と宣言し、言葉を直接的な命令に変えて大量虐殺を正当化する。この仕組みは、中国戦略思想の「風-勢」によって説明できる。すなわち、乾隆帝は「風」によって婉曲な言葉や詩を使い、対立を避けつつ自分の行動を道徳的に見せる。この短編は詩と暴力、文化と軍事が同時に描かれ、デーブリンが言葉と権力の関係を文学的に表現したテキストである。

「Die Fürstentochter」では、名家の娘 Poh が家を逃れ、反政府的宗教結社「破瓜教」に参加する物語である。彼女は自由を求めて共同体に入るが、実際には新たな規律と抑圧に直面し、最後には悲劇的な死を迎える。彼女が直接的に自らの苦境を語らず、歌と寓話的イメージ（亀との婚姻、狐の誘惑、魔物との戦いなど）によって間接的に心情を表現する点である。この語りの方は、中国戦略思想における「風」の原理、すなわち迂回的な表現によって真意を隠しながら訴える戦略に通じている。読者は彼女の歌の断片を手がかりに、背後にある強制や暴力を推測せざるを得ない。すなわち、本作は寓話と現実を重ね合わせるモンタージュ的手法を用いて、表面的には無為や自由を装う共同体の中に潜む隠れた支配を暴き出し、Poh の抵抗と挫折を描き出している。

本論で扱った四篇は、単なる付け足しではなく、風景描写は賦・比・興として物語の構造に組み込まれ、言語戦略「風-勢」は人物のやり取りや決定を方向づける。自然のイメージと対話の交錯によって、支配と抵抗、感情の揺らぎが文学的に可視化されるのである。こうした分析から、中国的要素は異国趣味を超えて作品の叙述設計を支える核となっていることが分かった。